

没後50年

金島桂華 — 自然へのまなざし

2025年9月27日(土) — 12月14日(日) 会場：常設展示室

※月曜休館 ※ただし、10月13日(月・祝)、11月3日(月・祝)、11月24日(月・休)は開館、10月14日(火)、11月4日(火)、11月25日(火)は休館。
 ※開館時間 9:30~17:00
 学会員によるギャラリートーク:9月27日(土)、9月28日(日)
 ふくふくおはなし美術館:10月26日(日)、11月29日(土)
 各日 14:00~

金島桂華(1892-1974)は、広島県福山市神辺町湯野に生まれ、京都画壇で活躍した日本画家である。14歳の時大阪に出て日本画を学びはじめ、19歳で京都の竹内栖鳳の竹杖会に入門している。26歳の時文展に初入選して以来、日展を主たる活動の場とし、ひたすら花や鳥など自然の中の生命の美しさを正攻法で描き続けた。当館は桂華作品を5点のみ所蔵していたが、2024年に金島家より41点の作品と700枚にのぼる数多くの美術資料の寄贈を受けている。本展では、それら新収蔵の作品・資料を調査し新たに得た情報を中心に、本画に至るまでの桂華の作画姿勢を紹介する。



No.80 《金魚(写生)》(部分)

日本画の制作においては、さまざまな工程があり、写生(スケッチ)、小下絵、大下絵を経て、本画が完成される。本画とは完成作の意味であり、紙や絹といった支持体に、墨や岩絵具などを塗り重ねながら仕上げていく。従って写生(スケッチ)は準備段階のものであり、本画を作り上げていく過程であって、それ自体は鑑賞を想定したものではない。

ここで《鶏頭(写生)》(No.81)を見てみよう。緻密に描かれた本図は比較的若い頃の写生と思われるが、本図の上部が大胆に破れているのはなぜだろうか。おそらく桂華本人が破ったのだらうと推定される。なぜなら彼のスケッチした用紙の多くに、さまざまなメモが書き留められているからである。画面の隅に、描いた日付や場所、モチーフの色彩や特徴に関する細かいメモや、「日が出ると点がはっきり光る」など描きながら気付いたこと、仕立てる本紙サイズ(例えば「縦□尺□寸、横□尺□寸」といったメモ)、「十月三日 竹杖会下見、二日夜笠会下見」といったスケジュール、箱書きや箱シールなどの依頼の内容、家族が出かける先のことなど、おそらくスケッチそのものには関係ない備忘録のような記載も残る。本図の場合、鶏頭のスケッチがほぼ終わった段階で急遽メモ用紙が必要になり、鶏頭の上部の輪郭に沿って余白を切り取ったと想像される。この切れ端は、特に重要な内容を書き留め手元に持ったか、又は誰かに渡す必要があったのではないかと、などといろいろな想像が可能である。時間をかけて集中して描いた作品であっても、スケッチそのものには執着しないことを示す例であろう。



No.81 《鶏頭(写生)》

現場での写生について桂華自身は「写生は人に見せる為ではなく自分の作品を作る上の準備としてやっていたのである。人に見られるという意識は少しもなかった。それを今頃になって見てもらおうと云うことは突然上着を脱がされ内懷を見られる様な気がする。然しそれは今の私の望むところである。今後ともこの通りを繰返して日々勉強する考えである。」と述べている。これは1958(昭和33)年「金島桂華素描展」(朝日新聞社主催、会場:東京松屋画廊)の図録に「作者のことば」として掲載された文章である。その後1973(昭和48)年にも「金島桂華素描展」(毎日新聞社主催、会場:東京三越)が開催されている。これに合わせて刊行された『金島桂華素描集』に掲載されている68点のうち、10点が今回の寄贈作品・資料に含まれる。これらには落款の印が押されていたり、本人の署名シールが額裏に貼られていたり、立派な額に収められていたりする。『金島桂華素描集』の自序には、「(前略)私は遭遇する自然を何でもすぐ写したくなるので(中略)見て心を打たれるものはスケッチしないと気がすまないであります。自然に対してはと相手から話しかけてくる。花は花、鳥は鳥、山は山の持つ心が、脈々と自分の心に伝わってきて、自然と一体となってこれを写生する楽しさは又格別のもので、疲れることを忘れず。従って小さな紙辺のスケッチ1枚にも、今日まで生きてきた歴史を見るように愛着を感じます。素描こそ二度とできない自分の本源をなすものだと思うのであります」と記している。60代後半になって、これまでの素描を「二度とできない自分の本源をなすもの」と言い、かけがえのないものとして振り返る気持ちになったのであろう。

このように、このたび寄贈された作品・資料群の中には作家の日常・非日常の記録や、下絵から本画に進むためにどのような紆余曲折があったかなど、本画だけ見たのでは知ることの出来なかった貴重な情報が多く含まれている。以下でいくつか取り上げてみたい。

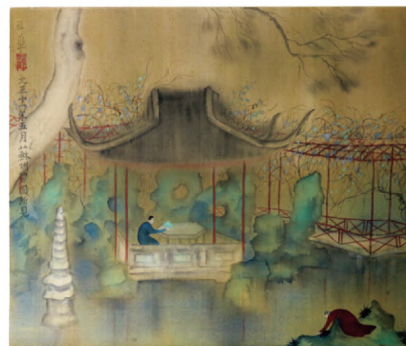
橋本関雪との交流とアジアへの憧憬

桂華は1917（大正6）年と1922（大正11）年に中国を旅行しており、1917年の時は橋本関雪（1883-1945）と同行している。関雪は桂華より9歳上で、竹杖会の先輩であった。関雪は当時頻繁に中国に行き、呉昌碩や王震ら中国人画家とも交流し、自身のアトリエ「白沙山荘」に中国人を招いている。「寒山拾得」や「玄宗皇帝と楊貴妃」など中国の故事に取材した作品を多く発表するなど、中国文化への強い傾倒で知られる画家である。

桂華《蘇州留園雨後》（No.1）の画題となった「留園」は、楼閣と太湖石群の見事な庭園で、蘇州4大名園の一つとされている。小品ながら橋本関雪からの影響が強く見られ、30歳前後の若き桂華の状況を知る手掛かりとなる作品である。同年の第4回帝展に出品した《怡園一角》（所在不明）も、中国風景を画題とした大作であり、当時中国を題材に真剣に取り組んだ様子が偲ばれる。

その後の関雪との交流が伝わる作品に《熊笹（写生）》（No.4）がある。画面左に「関雪先生邸にて福田兄と共に写す 十八年十一月二十六日」と書かれており、1943（昭和18）年に関雪の自宅にてスケッチしたことがわかる。福田兄とは桂華の良きライバルである福田平八郎（1892-1974）のことであろう。関雪は1923（大正12）年に竹杖会を脱会したが、桂華にとってはよき先輩として終生交流が続いていたようだ。

一方台湾に取材した作品に《蕃婦》（No.2）がある。本図は1935（昭和10）年の作であるが、これに先立つ作品として1932（昭和7）年の《台湾写生人物三題》（華鶴大塚美術館）もあり、この頃桂華はアジアの人々の暮らしや文化に着目した作品を制作している。《蕃婦》には「昭和十年於台湾ウライ蚕社」と款記があることより、原住民の女性をモデルにしたものとわかる。日本統治時代であった台湾に対し、どのような感情を抱いていたのかは定かでないが、異国の原住民たちの生活ぶりや衣装などに興味を抱いて画題にしたことが感じとれる。



No.1 《蘇州留園雨後》1922年



No.3 《月ヶ瀬早春》1922年

国画創作協会メンバーとの交流

《月ヶ瀬早春》（No.3）は梅林で有名な奈良県の月ヶ瀬を描いている。《蘇州留園雨後》と同年の作であり画風もよく似ている。月ヶ瀬は国画創作協会（国展）のメンバーもよく取材している場所だが、この国展は1918（大正7）年に文展に反旗を翻した小野竹喬や土田麦僊らによって発足した。《月ヶ瀬早春》が制作された1922（大正11）年は、国展主要メンバーが渡欧した年である。当時、桂華は1916-1917の文展で連続落選し、かなり作風を模索していたらしい。1918（大正7）年の《神之島風景》（井原市民会館）は、70.5×146.5cmの大作で、竹喬の《波切村》（笠岡市立竹喬美術館）と雰囲気似ており、日本画の絵具による西洋絵画のような強さのある写実表現を模索していた。一方、同年の桂華作品で第12回文展出品作《叢》は、非常に色鮮やかで装飾性豊かな花鳥画である。同じ年に全く画風の異なる大作を2点仕上げていたことで、この頃桂華は、国展か文展で迷っていたのではないかと考えられている⁽¹⁾。竹杖会の先輩である竹喬や麦僊による注目を集めた国展への憧れの気持ちも強かっただろうし、《叢》は同じく竹杖会の先輩であり文展連続特選を受賞した石崎光瑤の画風を意識した作品であろう。結局のところ桂華は国展ではなく、文展を舞台に活躍していくが、復帰した後の竹喬らとも親しく交流した。



No.6 《朝顔》1962年

朝顔を巡る速水御舟との交流

桂華は「畏敬する先輩」⁽²⁾と題して 速水御舟（1894-1935）について述べている。御舟は東京の人だが、1917-21年の5年間は京都に住んでいた。「御舟さんからは朝顔のいい花だからと言って種子を送っていただいた。永年この種は絶やさないように育てて夏の朝を楽しんだが、私はせっかくのこの朝顔をついに満足な作品にすることができなかった」と述べている。日展出品作などに朝顔をテーマにした大作は見当たらないが、今回寄贈された資料群の中には《朝顔》（No.6）を含め15点あり、写生以外に本画の下絵、団扇の下絵もある。御舟に種をゆずられたという特別な花であると同時に、夏らしい涼やかな画題としてニーズもあったのであろう。桂華は椿や山茶花のスケッチをたくさんしており、今回の寄贈品でも35枚が含まれる。御舟の《名樹散椿》⁽³⁾を意識したのではないだろうか。桂華の第12回日展出品作である《椿》⁽⁴⁾は、1本の椿の木をじっくりと描いた重厚な画風で、花も蕾も丁寧に表現した完成度の



No.10 《椿に雪（写生）》1940年

高い作品である。今回寄贈資料《椿（写生）（2）》（No.31）は1937（昭和12）年の作で、執拗に追求した現場での写生である。赤く咲いた花の小ささからすると、かなりの大樹であり、これだけ描きこむためには相当の集中力と時間を要したのではあるまいか。桂華の日展作に遡ること20年のこの写生画から、椿は常に身近であり、追求し続けた花であることがわかる。《歳寒二友》（No.29）は、扇面形の枠内に紅椿と白梅を組み合わせた作で、新春にふさわしいおめでたい作品である。「歳寒三友」といえば松・竹・梅のことであり、厳しい冬にも変わらず美しさや強さを示すことから、友情や不屈の精神の象徴として中国の古代から親しまれてきた。日本では松・竹・梅は慶事のシンボルとなっている。時代の流れの中で「歳寒三友」は梅・水仙・竹とされたり、「歳寒二友」は梅と菊だったり、組み合わせも複数ある。桂華の《歳寒二友》は紅白でおめでたく、いかにも好ましい絵柄で、注文も多かったのではないだろうか。

六潮会メンバーとの交流

このたび寄贈された作品・資料群の中で珍しいものと言えば、洋画家牧野虎雄が描いた《桂華画像》（No.8）であろう。水彩で大まかに彩色された桂華像の下に、桂華の書で「桂華画像 牧野虎雄之ヲ写ス 於東京四谷ノ料亭ニテ六潮会ノ会合ノ際 席二居ッタ者 福田平八郎 中村岳陵 山口蓬春 牧野虎雄 中川紀元」と記している。「六潮会」とはこの5名のメンバーに加え木村荘八、さらに美術評論家の外狩素心庵、横川毅一郎を加えて1930（昭和5）年に結成されたグループである。日本画家と洋画家がともに活動することで、「日本的洋画」を目指したという異色の会で、メンバーに福田平八郎がいる。桂華は平八郎の縁でこの会合に居合わせるようになったのであろうが、牧野が自分の肖像を描き、自身も詳細を記したうえ落款印まで押し額装して大切に所持していたことから、この会の活動に強い興味を感じていたことは想像できる。美術評論家が自身の推薦する画家をメンバーに加えるという特異なグループであり、平八郎は「洋画家たちから学んだことは今まで考え及ばなかったことで、すいぶん成長した」と、1932（昭和7）年に第1回六潮会展に向けて上京した時に述べている⁽⁵⁾。その年平八郎の自己を出し切った代表作《漣》⁽⁶⁾が帝展にて発表された。六潮会の存在は平八郎にとって大きく、また桂華にも大いに刺激を与えたことだろう。

雪景色へのこだわり

ここから、桂華が繰り返し描いたお気に入りの画題をみていこう。まずは雪を被った植物を多く描いていることに注目したい。本展出品作ではないが、よく知られるのは30歳時の《梅の雪》⁽⁷⁾で、一羽の鶴を中心に、画面上部には雪を被った梅樹、中央から下には南天の木を画面全体にびっしりと濃彩で描いた意欲作である。本展出品作《南天に雪》（No.9）は、小品であるものの本画ならではの色彩の美しさに目を奪われる。南天の朱と胡粉の白のコントラストが目にも鮮やかである。このたびの寄贈作品・資料には15点の雪景色の写生画があり、雪とともに描かれた植物は南天、竹、椿が3点ずつ、梅樹が1点、種類不明の樹木が4点である。京都衣笠の自宅で、朝雪が積もっているのを見ると、急いで庭に出てその情景を見つめたであろう桂華の様子が目に浮かぶ。雪の残る早朝は指も凍えるような寒さであっただろうが、真白な雪と黒っぽい枝や南天の実など目にも鮮やかなコントラストが、画家の絵心を刺激し、繰り返し描いたのであろう。

鶴の写生画・小下絵・大下絵・本画

桂華は多くの花鳥画を描き、繰り返し描いた画題は、既に挙げた椿の他にも花では牡丹、芍薬、菖蒲など多種あるが、鳥ではなんといっても鶴が圧倒的に多い。3羽の鶴が天を仰いで鳴く様子を描いた《鳴九皋（きゅうこうになく）》⁽⁸⁾は、第8回帝展で特選となり、宮内庁買上となった桂華の代表作である。《双鶴》（No.47）は、2021年に当館の所蔵となった1幅であるが、その同じ構図の《鶴（小下絵）（2）》（No.50）と並べて展示される。また《鶴（大下絵）》（No.49）は、本画と同じサイズに引き延ばした画稿で、裏に木炭を塗り転写した跡があり、作家の制作行為がリアルに伝わる資料である。

鶴はその吉祥性と姿の美しさを兼ね備えた人気の高い画題であり、多くの画家が手掛けている。他の作家が描いた鶴の真似でなく、自身の独自性のある表現をと、だれもが躍起になって取り組んでいたと思われる。しかし桂華は奇を衒うことなく、常に真っすぐに対象を



No.21 《朱芍薬》



No.34 《白椿（写生）》



No.48 《鶴（大下絵）》



No.47 《双鶴》

見つめ「正攻法」という表現がぴったりの作画方法を貰いた。「桂華の作品はよく真面目過ぎる、画きすぎる、面白みに欠けるとの批評を耳にした。(中略)然し父はそれを百も承知の上で自分の信念に基いて終世自分の作品を描き続けた」と息子の靖氏は語っている⁽⁹⁾。

鯉を描く

当館所蔵の《魚心暖冬》(No.61)は、寒い冬で動きのにぶいはずの鯉たちが、ゆったりと過ごす温かみのある作品である。鯉は中国の「登竜門」の故事や、日本での端午の節句に飾る鯉のぼり、公園や庭の池で愛でる観賞用の錦鯉といったふうに、人気の高い画題である。桂華と同時代の画家たちもよく描いて作品にしていた。福田平八郎は鯉の研究に没頭し、自身の足を白い鯉に見立て、風呂につかって足を上下に動かしながら浅いところと深いところの見え方を研究していたとの逸話が伝わる。そして平八郎作の《鯉》は、1921(大正10)年第3回帝展で特選となり出世作となった。当館の桂華作《魚心暖冬》は1936(昭和11)年新文展招待展出品作、さらに《鯉》⁽¹⁰⁾は、第8回日展において文部大臣賞を受賞した記念碑的な作品である。

このたびの寄贈作品・資料には30点もの鯉の写生画、小下絵等がある。本物をじっくり観察した写生画や、墨や絵具、色鉛筆等で大まかに構図を検討した小下絵など、繰り返し描いている。鯉は桂華にとって重要なモチーフであり、相当な思いを込めて取り組んだ様子が偲ばれる。

桂華は果物や野菜も多く描いている。樹木に果物が実っている様子、例えば柿やミカン、石榴などが木からぶらさがっている様子や、実のついた枝を手折って写生していたり、リンゴや桃などを皿に盛った静物画として描いたりしており、桂華の視線はあらゆるものに多角的に興味を向けている。このたびの寄贈作品・資料の中で興味深いのは、《静物(リンゴ)(1)》(No.65)である。聖母子の絵柄の皿に盛られた3個のリンゴが描かれているが、別の薄い麻紙に描かれたリンゴがその形のままだに丸く切り取られたものを貼り付けているのである。画家のリアルな制作工程が垣間見えて興味深い。

桂華は気に入ったポーズの鳥や小動物、花瓶など、繰り返し描いた形跡がある。以前の写生を薄い麻紙などに写し取り、本紙に念紙(カーボン紙の役割をする)で転写して再利用したような形跡が見られるものもいくつか見つかった。《落葉に鶉(小下絵)》(No.38)の2羽のツグミは、しばしば作品に登場する。《燕(小下絵)》(No.44)にも似たポーズの小鳥がいる。本画で完成度の高い《庭前の早春》⁽¹¹⁾にもいれば、《鶉》⁽¹²⁾もそうである。正面を見る鳥の表情はほほえましく、よっぽど気に入ったポーズの鳥なのであろう。

その他、桂華が自身で裏打ちをした形跡の見える作品が興味深い。《桜花(写生)》(No.12)は本紙に対し右下部分の裏打紙が不足している。また《蜜柑の木(写生)》(No.72)は、左上部分が紙の元々の大きさであるが、写生を続ける段階で描く面積が不足してしまったため、右下に紙を継ぎ足して描写を続け、紙の無い右上と左下に裏打紙を貼ることで補強し1枚としている。

本画は完成品であり、作家にとって最終結果のようなものである。多くの日本画家は展覧会や個展等で本画を発表し、真価を問う。その1点1点の作品の完成のために、おびただしい数の写生画や下絵を描く。このたびの寄贈作品・資料を多く紹介する本展では、一見地味に見えるかもしれないが、制作上の様々な試行錯誤を示すものも多く、作家自身の息づかいが聞こえてくるようなリアリティが魅力とも言えよう。想像をたくましくして、作家が画題に向き合う姿を思い浮かべながらご覧いただきたい。

今回の作品・資料の受贈によって、桂華自身の制作段階や当時の画壇の様子など新たな一面を垣間見ることができた。これからも桂華研究に多いに役立ててもらいたいと思っている。

(学芸員 中村麻里子)

【謝辞】

金島桂華の没後50年は昨年(2024年)でしたが、このメモリアル年にも多くの桂華作品・資料をご寄贈いただきました。1年遅れになった本展開催にあたって、ご遺族の皆様からは多大なご協力を頂戴しました。また三宅利枝氏(華鶴大塚美術館主任学芸員)にも貴重な情報のご教示を賜りました。心より感謝の意を表します。

【註】

- (1) 谷藤史彦「品格の様式美—金島桂華の芸術」『生誕110年 金島桂華展』展覧会図録 ふくやま美術館 2003年 165頁
- (2) 前掲図録181頁
- (3) 速水御舟《名樹散椿》重要文化財 1929年 紙本着色 2曲1双 各167.9×170cm 山種美術館
- (4) 金島桂華《椿》1956年 紙本着色 1面 165×106cm 京都府立総合資料館(京都文化博物館管理)
- (5) 原田平作「新しい日本画の世界を開く」『20世紀日本の美術8 東山魁夷・福田平八郎』1986年 集英社 93頁
- (6) 福田平八郎《漣》重要文化財 1932年 絹本着色 156.6×185.8cm 大阪中之島美術館
- (7) 金島桂華《梅の雪》1921年 絹本着色 195.2×87cm 華鶴大塚美術館
- (8) 金島桂華《鳴九草》1927年 宮内庁
- (9) 金島靖「父・金島桂華」『備後が生んだ—金島桂華名作展』中国新聞社 1985年 7頁
- (10) 金島桂華《鯉》1952年 紙本着色 180×110cm 菅茶山記念館
- (11) 金島桂華《庭前の早春》1940年頃 紙本着色 55.2×61.3cm 華鶴大塚美術館
- (12) 金島桂華《鶉》1955年頃 紙本着色 69.4×42cm 個人(「生誕130年金島桂華展」菅茶山記念館 2021年 出品作品No.18)



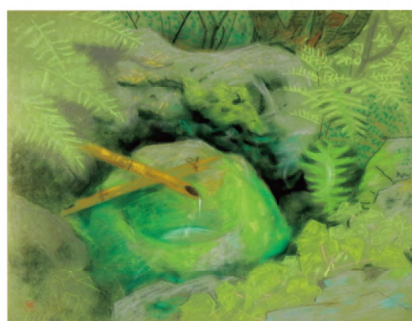
No.44 《燕(小下絵)》



No.38 《落葉に鶉(小下絵)》



No.65 《静物(リンゴ)(1)》1962年



No.79 《蹲距(つくばい)》

没後50年 金島桂華ー自然へのまなざし

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)	※寄託
1	金島桂華	1892-1974	蘇州留園雨後	1922	紙本着色	34.0×41.0	※
2	〃		蕃婦	1935	紙本着色	155.3×91.2	
3	〃		月ヶ瀬早春	1922	紙本着色	38.0×41.3	
4	〃		熊笹 (写生)	1943	紙、水彩	81.0×56.5	
5	〃		菊	1955	紙、鉛筆、色鉛筆	62.0×70.0	
6	〃		朝顔	1962	紙、水彩	59.5×47.0	
7	〃		落葉 (写生)	1921	紙、水彩	44.8×61.0	
8	牧野虎雄	1890-1946	桂華画像	1930 頃	紙、水彩	31.0×24.0	
9	金島桂華		南天に雪	1968	紙本着色	26.0×23.0	
10	〃		椿に雪 (写生)	1940	紙、水彩	39.8×55.0	
11	〃		南天に雪 (写生)		紙、水彩	77.5×55.0	
12	〃		桜花 (写生)		紙、色鉛筆	56.0×80.0	
13	〃		南天 (写生)	1929	紙、水彩	39.5×55.0	
14	〃		菖蒲		紙本着色	25.0×36.5	
15	〃		菖蒲 (扇面)		紙本着色	37.5×44.5	
16	〃		菖蒲 (小下絵) (1)		紙、水彩	60.2×50.7	
17	〃		菖蒲 (小下絵) (2)		紙、水彩	57.0×62.0	
18	〃		芥子 (写生) (1)		紙、鉛筆、水彩	54.0×79.0	
19	〃		芥子 (写生) (2)		紙、鉛筆	54.5×64.5	
20	〃		黄蜀葵 (トロロアオイ)		紙、水彩	95.0×63.0	
21	〃		朱芍薬		紙、水彩	80.0×54.0	
22	〃		微風牡丹		紙、水彩	71.5×53.5	
23	〃		芍薬 (写生) (1)		紙、水彩	54.7×78.5	
24	〃		牡丹 (写生) (1)		紙、水彩	36.0×48.5	
25	〃		芍薬 (写生) (2)		紙、水彩、色鉛筆	55.0×79.2	
26	〃		芙蓉 (写生) (1)	1937	紙、鉛筆、色鉛筆	55.0×79.3	
27	〃		芙蓉 (写生) (2)		紙、水彩	44.0×52.8	
28	〃		芙蓉 (写生) (3)		紙、水彩	33.5×41.5	
29	〃		歳寒二友 (紅椿と白梅)		紙本着色	44.5×52.5	
30	〃		椿 (写生) (1)	1937	紙、水彩	44.8×60.7	
31	〃		椿 (写生) (2)	1937	紙、水彩	54.8×79.0	
32	〃		椿 (小下絵) (1)		紙、パステル	49.0×60.5	
33	〃		椿 (小下絵) (2)	1939	紙、水彩	56.2×80.8	
34	〃		白椿 (写生)		紙、鉛筆、色鉛筆	65.5×95.2	
35	〃		白木蓮 (写生) (1)		紙、鉛筆	55.0×36.5	
36	〃		白木蓮 (写生) (2)	1940	紙、水彩	78.0×56.0	
37	〃		柿にオナガ (小下絵)		紙、水彩	49.0×63.8	
38	〃		落葉に鶇 (小下絵)		紙、墨、色鉛筆	59.5×72.3	
39	〃		柿に小禽 (小下絵)		紙、水彩	50.3×60.2	
40	〃		椿に小禽 (小下絵)		紙、墨、水彩	38.5×47.3	
41	〃		紅葉に小禽 (小下絵)		紙、パステル	58.0×69.5	
42	〃		紅梅に小禽 (小下絵)		紙、水彩	44.3×55.3	
43	〃		蕪 (写生)		紙、鉛筆、色鉛筆	29.5×49.2	
44	〃		蕪 (小下絵)		紙、鉛筆、水彩、色鉛筆	66.5×72.5	
45	〃		桎梏図		絹本着色	34.0×52.0	※
46	〃		キビタキ	1947	紙、水彩	29.5×21.0	
47	〃		双鶴		紙本着色	42.5×54.0	
48	〃		鶴 (大下絵)		紙、墨、木炭	131.0×54.7	
49	〃		鶴 (小下絵) (1)		紙、墨	48.5×56.8	
50	〃		鶴 (小下絵) (2)		紙、墨	48.5×59.3	
51	〃		鶴 (小下絵) (3)		紙、水彩	20.3×33.4	
52	〃		鯉 (写生) (1)		紙、墨	56.0×79.2	
53	〃		鯉 (写生) (2)		紙、鉛筆	65.5×76.5	
54	〃		鯉 (写生) (3)		紙、水彩	27.3×45.5	
55	〃		鯉 (写生) (4)		紙、水彩	34.5×48.8	
56	〃		鯉 (小下絵) (1)		紙、パステル	35.3×50.3	
57	〃		鯉 (小下絵) (2)		紙、水彩	48.0×55.0	

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横（cm）	
58	金島桂華	1892-1974	鯉（小下絵）(3)		紙、墨、朱墨	40.2×53.0	
59	〃		川鯉（写生）		紙、鉛筆、色鉛筆	38.5×52.3	
60	〃		緑陰遊鯉		紙本着色	59.0×68.3	※
61	〃		魚心暖冬	1936	絹本着色	147.7×250.5	
62	〃		柿	1954	紙、色鉛筆	43.0×49.5	
63	〃		柿（写生）	1946	紙、水彩	74.5×43.0	
64	〃		静物（桃）		紙、水彩	49.8×52.5	
65	〃		静物（リンゴ）(1)	1962	紙、水彩	39.3×60.3	
66	〃		静物（リンゴ）(2)		紙、水彩	47.0×67.2	
67	〃		マスカット		紙、水彩	28.5×37.0	
68	〃		静物（葡萄）		紙、パステル、水彩	43.0×55.0	
69	〃		豆の花（写生）(1)		紙、鉛筆、水彩、色鉛筆	79.0×55.0	
70	〃		豆の花（写生）(2)		紙、鉛筆、水彩、色鉛筆	79.0×55.0	
71	〃		茄子（写生）		紙、鉛筆、色鉛筆	55.0×79.0	
72	〃		蜜柑の木（写生）	1928	紙、色鉛筆	33.0×55.0	
73	〃		夏草にトンボ		紙、水彩	48.8×72.3	
74	〃		蟪蛄（かまきり）		紙、色鉛筆	31.0×23.0	
75	〃		飛蝗（バッタ）		紙、色鉛筆	14.0×21.5	
76	〃		ブードル		紙、水彩	19.5×17.0	
77	〃		ブードル（写生）	1971	紙、鉛筆	50.5×62.8	
78	〃		曇日の丘	1960	紙、パステル	15.0×35.0	
79	〃		蹲距（つくばい）		灰色紙、パステル	49.5×64.5	
80	〃		金魚（写生）		紙、水彩	36.5×49.0	
81	〃		鶏頭（写生）		紙、水彩	52.0×26.3	
82	〃		薔薇（写生）(1)		紙、水彩	54.0×38.0	
83	〃		薔薇（写生）(2)		紙、色鉛筆	56.5×39.0	

栖鳳に学んだ日本画家たち

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横（cm）
84	小野竹喬	1889-1979	春の芽		絹本着彩	27.0×23.0
85	〃		柳蔭	1918	絹本着色	118.0×39.5
86	橋本閑雪	1883-1945	夏山観瀑		絹本着色	131.0×27.5
87	池田遙邨	1895-1988	南軽井沢之図	1959	紙、クレヨン、色鉛筆	31.7×48.5
88	大村廣陽	1891-1983	雪	1929	絹本着色	201.0×191.0

東京美術学校・東京藝術大学での指導者たち

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横（cm）
89	梅原龍三郎	1888-1986	ピワ	1947頃	紙、デトランプ	37.5×65.0
90	〃		百合	1973	油彩、カンヴァス	45.7×38.0
91	南薫造	1883-1950	夏	1919	油彩、カンヴァス	116.7×91.0
92	舟越保武	1912-2002	聖クララ	1982	ブロンズ	49.0×50.0×奥行30.0
93	林武	1896-1975	薔薇		油彩、カンヴァス	40.0×31.0
94	脇田和	1918-2005	鳥の伝言	1986	油彩、カンヴァス	72.0×58.0

新収蔵品紹介

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	縦×横（cm）
95	福田美蘭	1963-	ダイヤル・ショッピング	1989	アクリル絵具、ミクストメディア、パネル	181.8×227.2

茶室 松本コレクションの茶道具

No.	作家名	生没年	作品名	制作年	材質技法	サイズ（cm）
96	永樂即全（永樂家16代）	1917-1998	御本写猿猴茶碗	昭和・平成時代	陶	高8.3×口径12.5
97			了々斎好 菊絵八角菓子盆	江戸時代	桐	高5.0×幅26.2×奥行26.2
98	惺斎宗左（表千家12代）	1863-1937	茶杓 銘出世鯉	大正・昭和時代	竹	長18.3
99	樂宗入（樂家5代）	1664-1716	赤樂舟釣花入	江戸時代	陶	高8.7×幅21.8×奥行12.2

※は寄託作品